はなく農村までこうした焼き物が広まっていたことを示しています。

そうした中で、飯能焼の製品は、江戸・江戸近郊(現在の東京23区)の遺跡からの出土が多く報告されています。武蔵国の外れにある小さな窯にも関わらず、どうして製品を江戸に売り出すことができたのでしょうか？　現代風に言うと、大手企業がシェアを独占している業界に、どのようにくさびを打ち込んでいったのでしょうか。発掘調査でわかったことの中にそのヒントが隠れているようです。

戦略①　イメージブランド戦略！

他にはない特徴あるデザインに統一して、「飯能焼」の名を広めよう！

戦略②　隙間を狙え！

他産地の得意分野は避けて、独自の文様やセンスで「飯能焼」を印象づけよう！

戦略③　自分を知り、かつ流行に乗れ！

飯能焼の粘土の特徴を活かして、当時流行し始めた“小鍋立て”用の鍋を大量生産して、経営基盤を安定させよう！

戦略④　ターゲットは江戸だ！

人口が多く小料理屋や宿屋も多い江戸向きの食器を売り出そう！

原窯では、何をつくりどのように売るかといった市場リサーチを事前に行っていたと思われます。

4．飯能焼という産業を企画したのは誰？

飯能焼の原窯を直接経営していたのは、『土瓶屋』という屋号の八右衛門という人であることがわかっています。当時の住民票にあたる「宗門人別帳」によると、八右衛門は1852年以降、陶工や絵師などの身元引請人になっています。また、発掘調査でも『八　土瓶屋』という焼き物印(図４)が出土しているので、窯元であったことは確かでしょう。

疑問１　八右衛門は、わかっているだけでも陶工や絵師６人の引請人となっています。これらの職人は信楽や美濃などいろいろな場所から呼ばれてきています。八右衛門ひとりの力でこのような経営規模の拡大がおこなえたのでしょうか。

疑問２　図３は化粧品(髪油)の入れ物で、商品名のほかに「すみよし町」「まつもと」という、日本橋、住吉町にあった歌舞伎役者松本幸四郎のお店の名前が入っています。このような注文生産の仕事を誰が取り付けてきたのでしょうか。

図３　化粧品容器(第３～５次調査出土)

5．飯能町の商人

そこで浮かび上がってくるのが、金子清吉(双木清吉)という人物です。1830又は1842年の干支年号をもつ墨書土器に「金子清吉」の名前が見られ(図４)、また初期の片手鍋の握手に「子」の型印が使用されていること、土瓶屋八右衛門や二代目新平の家主であることなど、操業初期の原窯に関わっていたと思われますが、どのような役割を果たしたのかは、よくわかっていません。

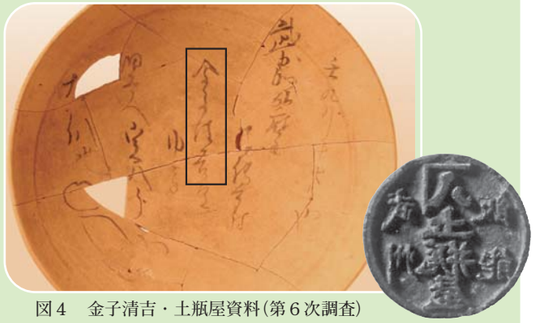

図４　金子清吉・土瓶屋資料(第６次調査)

金子清吉は、はじめ飯能町の薬種問屋金子忠五郎家に奉公し、のちに独立しています。金子忠五郎家は、飯能縄市を構成する久下分村の名主を務め、その後、武蔵野鉄道(現在の西武鉄道)設立に尽力したことからわかるように飯能町有数の商家です。

飯能の町は、“西川材”の江戸への流通でわかるように江戸地廻り経済圏に入っていました。窯が真能寺村名主の双木利八郎家の隣地に開かれていることなど、土瓶屋八右衛門の原窯経営には、飯能町の旦那衆の関与が見え隠れしているようです。

『飯能の遺跡（27）(34)(35)』(1999・2006・2007）飯能市教育委員会
『掘り起こせ！地中からのメッセージ』（2010）飯能市教育委員会
『飯能焼原窯の研究（１）』『飯能市郷土館研究紀要』第４号（2008）

はんのうお宝スポット
HANNO Treasure Spot Information.
Vol. 17
発行：飯能市教育委員会生涯学習スポーツ部生涯学習課（文化財担当）〒357-8501　飯能市双柳1-1　Tel(042)973-2111
第17号　令和４年３月31日発行　平成18年３月31日創刊

今号から新たな特集シリーズが始まります！

●第17号は２本立てです

前号まで２号にわたり「植物利用」を特集してきましたが、今号では飯能の歴史や文化を語る上で欠かせない「仏像」と「飯能焼」についてご紹介します。なお、仏像については全３回のシリーズを予定しており、今号はその入門編とも言える内容になります。

ぜひ記事を通して、人びとの祈りやかつての飯能を盛り上げた産業に思いを馳せてみてください。

飯能の仏像　①仏像の楽しみ方・仏像の種類

飯能市文化財保護審議会委員
林　宏一

このお正月、近くの寺社に初詣、さらには足を延ばして「七福神めぐり」に行かれた方も多いと思います。ご承知のように七福神は恵比寿、大黒天、毘沙門天、弁財天、福禄寿、寿老人、布袋の七人の福神を云いますが、このうち仏教に由来する福神は大黒天、毘沙門天、弁財天、布袋の四神となります。布袋は、中国唐代末に実在したという伝説的な僧で、大きな袋を背負い太鼓腹の特徴ある姿で数々の不思議を現し、のちに弥勒の化身として人々に尊ばれ、わが国では江戸時代も後半頃に七福神の列に加えられた方です。この他の大黒天、毘沙門天、弁財天は、インド在来の神々に起源を持つ仏教の護法神で、尊名の最後に「天」が付くように、如来・菩薩・明王・天部と分けられる仏像の世界の「天部」に属し、各々の得意な験力による除災増福開運延寿に御利益ある福神として親しまれています。天部には、他に帝釈天、吉祥天、歓喜天、鬼子母神や仁王尊など庶民に人気のある尊像が多くあり、現世利益を求める人々の願いに応えています。

さてこうした異教の神々に出自を持つ天部諸尊に支えられて仏教世界のトップに立つ方が「如来」です。如来は、厳しい修行を経て真如の理を証得(悟り)し、煩悩に迷う衆生を済度するためにこの世に現れた方で、覚者の意味をもつ「仏陀」・「仏」とも呼ばれています。ＢＣ５Ｃ頃初めて仏法を説いた現世仏である釈迦をはじめ、釈迦滅後多くの弟子や後継者達によって、より広くよりわかりやすく衆生の心を平安に導くために創案された阿弥陀、

阿弥陀如来と脇侍（旧西光寺）

薬師、弥勒等の諸尊、さらには密教思想の登場に伴い、広大な宇宙に光明遍照し生きとし生けるものの仏性を覚醒させる大日如来(毘盧遮那仏)等が存在しています。永い修行を経て悟りの世界に達した如来は、密教系の尊像を除き、蓬髪(螺髪)・弊衣(衲衣)の修行者のような姿で表されています。

これらの如来を補佐して衆生の仏道成就を援ける方々が「菩薩」です。観音、地蔵、虚空蔵、文殊、普賢、勢至等我々にとっては最も身近に居て、正しい祈りの道筋を教えてくれています。菩薩は、既に悟りの境地に達せられていますが、衆生済度にさらなる実践を重ねて如来の資格を得ようとされている、いわば医学生のインターンのような立場の方と云えましょう。その姿はインドの王侯貴族をモデルに、高く華やかな髻を結い、上等な薄物の衣装をまとって、煌びやかな宝石を連ねた目にもまばゆい装身具で身を飾っています。

聖観音(長念寺)

一方、不動明王に代表される「明王」は密教独特の尊像です。古代インドで7・8C頃成立した密教は、大日如来を絶対の教主におき、それ以前の仏教(顕教)の諸尊を曼荼羅世界に包摂した深遠秘密の教えと行を説く新しい仏教思潮で、唐代に中国で漢訳整備され、わが国には9C初めに空海により真言密教として伝えられました。明王は大日如来の化身として仏法に敵する魔障を撃破する強い力を持つことから、忿怒形・多面多臂・多目多脚など異形の姿で表されます。赤や黒・青等の原色の肌を持ち、不思議な手印を結び、髑髏や蛇・獣皮などを身にまとうなど怪奇変幻の姿は拝する者に畏怖の念をうえ付けずにはおきません。その多くはヒンドゥー教の神々に由来するものが多く、短身肥満、童子のような体型をもつ尊像がめだちます。

以上、仏教では仏像の種類を大きく如来・菩薩・明王・天部の四つに分けていることが御理解いただけたでしょう。それぞれの姿は、経典や儀軌によって細かく定められています。詳しく学びたい方は、関連の書籍が図書館や書店に沢山列んでいるので手に取ってみて下さい。

今ひとつ、よいことをお教えしましょう。参拝に訪れるお寺の山号や名称で、その寺の本尊さまがおおよそ分かることです。如来にはそれぞれ常住されている国、すなわち浄土があります。釈迦は霊鷲山浄土、阿弥陀は西方極樂浄土、薬師は東方瑠璃光浄土、弥勒は北方兜率天浄土、それに菩薩になりますが、観音は南方補陀洛浄土であることは御存じの方も多いと思います。山号や寺名にこれら諸尊の浄土や方角の文字が入っていれば、その寺の本尊さまがほぼ類推できるでしょう。山号が霊鷲山であれば御本尊はお釈迦さま、寺名が西方寺や極楽寺であれば阿弥陀さま、東国寺・瑠璃光寺であれば薬師さまと云うように。

不動明王(常楽院)

また、その寺の宗派から御本尊さまを知ることも出来ます。それぞれの宗派によって礼拝する仏像がほぼ決まっているからです。真言宗なら不動さまか大日さま、天台宗なら薬師さまや観音さま、浄土宗や真宗・時宗なら阿弥陀さま、日蓮宗なら釈迦・多宝仏、禅宗ならお釈迦さまと云ったように。

いかがでしょう。飯能市内に沢山のお寺やお堂が在り、そこに古くから信仰され護り伝えられてきた多くの仏像が祀られています。市の教育委員会によるこれまでの丹念な調査によって、ようやくその全容が明らかになってきました。次回以降は、そうした飯能の仏像の魅力をさまざまな角度から探ってみましょう。

(林　宏一)

飯能焼(はんのうやき)と飯能焼原窯跡(はらがまあと)　ー幕末のベンチャー企業の挑戦ー

生涯学習課 文化財専門調査員
富元久美子

1.「飯能焼」・「飯能焼原窯」とは？

陶磁器の名前は、通常“有田焼” 瀬戸焼”のように、つくられた地域や地方の名前で呼ばれます。

江戸時代の末、飯能で陶器の焼き物がつくられていたことは、昭和の時代になっても飯能の人々の記憶に新しく、様々な伝承が残り、聞き取り調査も行われてきました。

明治21年(1887)に刷られた『大日本陶磁器窯元一覧』というちらしにも「飯能焼」という名称が記載されているので、全国的にもこの名前で知られていたことがわかります。

「飯能焼」を作っていた登り窯は、昭和初期まで八幡町(当時の地名は“原町”)に残っていました。ところが昭和50年代に、大字矢颪や東吾野でも江戸時代の窯跡が発見されたので、八幡町の窯を「飯能焼原窯跡」、新しく発見された窯を「矢颪窯跡」「白子窯跡」と呼んで区別することになりました。

ここでは「飯能焼原窯跡」を中心に、発掘調査によってわかってきた「飯能焼」とはどのようなものなのか、誰がつくったのか、何故飯能で焼き物をつくったのかと、いうことについてお話したいと思います。

2. 飯能焼原窯跡の発掘調査

これまで、飯能焼原窯跡では８回の発掘調査が行われています。

・発掘調査でわかったこと①

図１は、飯能焼の特徴をよくあらわしたもので、食卓の上にあがるような食器に繊細で優美な文様を描いています。文様は「イッチン描き」といって白粘土を絞り出して付けたものです。図１の他にも灯明皿、土瓶や皿など主に食器類を生産していますが、当時もっとも需要のあった「碗」(茶碗・湯呑)は作っていません。

釉(うわぐすり)も緑褐色に統一され、鉄釉(黒や赤色の釉)、染付・色絵など、他の技法を使った製品がほとんどなかったことも発掘調査で確認できました。思った以上にデザインを統一していたようです。

図１　発掘調査で出土した飯能焼
(飯能市郷土館特別図録「大地に刻まれた飯能の歴史」)より

・発掘調査でわかったこと②

これまで、旧家などに代々保存されていた「飯能焼」のうち最も多いのは“徳利”で、ひょうたん文様の徳利が「飯能焼」の代名詞といわれるほどでした。しかし、発掘調査の結果思いがけないことがわかりました。

第６次調査で出土した飯能焼の破片をすべて器種ごとに計量した結果、出土した約850kgのうち、なんと75％が片手鍋の破片だったのです。個体数に換算しても全体の60％以上にあたる量でした。

片手鍋とは１～２人分の小料理に使う小さい鍋で、図２のようにして調理し、そのまま食器として使うこともできました。飯能焼を作る粘土は、磁器のような白さをだすことができない代わり、耐火性に優れ、鍋や土瓶に適していました。

3. 飯能焼の戦略

江戸時代には、九州の有田、瀬戸・美濃、信楽・京都など、有名な産地の焼き物が全国に出回っていました。市内でも張摩久保遺跡等で肥前や瀬戸・美濃の陶磁器が多く出土しており、都市部だけで

図２　出土した片手鍋と七輪